

初級和声の課題実施におけるエラー防止を目的とした 歌唱教材の効果に関する研究

橋本 剛

音楽教育講座

A Study About the Effects of the Song as Teaching Material for the Prevention of Error in the Problem Solving of Introductory Harmony

Go HASHIMOTO

Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 教員養成系大学における和声学習の意義

器楽演奏や声楽を主専攻とするものが多い音楽科学生にとって、和声分析は楽曲の構造を知る上で有効な手段のひとつであり、音楽に対する感覚を鋭敏にさせる点でも和声の修得はきわめて重要である。これまでも和声教育の意義については多方より論じられており、今もなお集団授業の難しさと向き合いながら授業者はよりよい授業運営を目指す努力を続けている。二宮(2020)の言う「和声の試験を受ける学生は、何とか単位を取ればその場限りのものとして忘れ去り、何ら音楽の表現とは結びつかないままに終わるようなことが少なくない」という状況を防ぐ努力は指導者として惜しんではいけないだろう¹⁾。

全国の教員養成系大学の和声に係る授業の開講状況を見ると、開講なし、半期のみ、通年、3半期以上と大学によってさまざまである。愛知教育大学教育学部義務教育専攻音楽専修の授業「和声学」は、1年次後期に開講される1半期(全15回)のみの選択科目であるが、専科学生は毎年全員履修しており、授業風景はかつて必修科目であった頃と比べると変わりはなく、教材は数種の教則本の内容を学生向けに要約して作成した独自のプリントを使用しており、授業担当初年となった2005年度は教材開発と並行しながらの講義であった。初期は半期だけで『和声 理論と実習Ⅲ』の内容に迫る勢いで進めていたが、年々学生の理解が追いつかない現実に対応するうちに授業の進度も緩めざるをえず、現在では授業内容を同I巻のV₇までの範囲にとどめている。ただし、V₇は早期に紹介するようにしており、3和音+V₇の基本形を用いたバス課題とソプラノ課題の実施→3和音+V₇の転回形を用いたバス課題とソプラノ課題の実施という大まかな流れで授業を進めている。新井・木下(2015)は『和声 理

論と実習Ⅰ～Ⅲ』の欠点として「ソプラノ課題の取り扱いがとて遅い段階に置かれている」ことを挙げているが²⁾、たしかに早期にソプラノ課題を導入する必要性は授業を担当した当初から感じており、I巻レベルの知識で実施可能なソプラノ課題が授業に求められていた。こうした事情もあって、授業ではバス課題もソプラノ課題も独自に作成したものを取り扱っている。また、のちに和声学学修支援システム「和声の祭典」が開発されたことを受けてからは³⁾、課題を精選した上で、授業外の時間に行えるドリルとして同システムを併せて活用することを2018年度より履修者に奨励している。

なお、V₉、II₇やIV₇、準固有和音、V₇をはじめとする副V和音などは、それらを駆使すること自体が立派な作曲技法といえるため、必ずしも和声に係る授業の範疇で取り扱うことはないとの考えから、V₉以降の内容は、4声体課題の実施を伴わないかたちで2年次前期以降開講の理論・作曲実習系の授業で紹介し、積極的な応用実践を促している。よって、近年は3和音(I・II・IV・V・VI)およびV₇の転回形を用いたバス課題とソプラノ課題が実施できる範囲を初級和声と位置づけ、実際の「和声学」の授業でもあくまで初級和声の範疇で講義を進めるようにしている。

授業内容は、のちに課題実施で得た総合的な知識を基に楽曲分析を試みる場面は設けるものの、全15回の大部分は4声体課題の実施および弾奏に専念するというシステムチックなものになっている。4声体の実習を経て履修者に伝えたいことは、合奏体の鳴り響きのよしあしは配置の状態に左右され、佳曲はえてして横の流れがどの声部も歌えるほどの流麗さを帯びているという2点に集約される。つまり、演奏や作編曲への応用を図るために縦の配置と横の流れの両方に意識をはたらかせる訓練として4声体課題の実施に重点

を置く方針を今もなお堅持しているのであるが、新井・木下は「和声（音楽不在の）単なるパズルとしか捉えられない学生も少なくない。」と憂慮する。その理由を「和声を書く学習は、音の配置や進行、和音連結、連続音程の禁止など、規則づくめのところからスタートするがゆえに」としており²⁾、小山（2015）や彦坂（2016）も禁則事項の多さを学習者の拒否反応を起こさせるものとして問題視している^{4) 5)}。学習者がパズルのような感覚で和声課題に臨む姿勢をよしとしないむきがあるが、実は学生から「パズルみたいで楽しい」という声を毎年のように漏れ聞く身としては、その気持ちがある後に学びを深くするための出発点であってよいと考えている。まずは楽しいと思えることが大事である。

これらを総合するに、教員養成系大学における4声体実習を介した和声学習の意義は、数々の制約をぬって良好な仕上がりを目指す対応力と、自身の実施例の誤りに気づいてそれを修正できる推敲力を養うことにあると考える。与えられた条件下で最大限の努力をすることや、異常を察知する目ももち、問題解決のために反射的に動くことは、将来教員になる上でも必要な素養といえよう。それを「和声で教える」ことが授業者の大事な役割でもある。本稿は、履修者の理解度を示す課題の平均点を向上させるために大小さまざまなエラー¹⁾の発生率を抑えるにはどうしたよいかについて、2006～2022年度の17年間で得られた556人分のデータを基に考察を重ねてきた和声学の授業担当者としての講義実践研究録である。

2. 中間課題の導入

授業担当初年は、受講者の様態に応じて新たに教材を作り足していくというやり方で毎週の授業を進めたが、2年目となる2006年度からは授業運営も軌道に乗り、前年度の反省をふまえながら授業改善に努めるゆとりがもてるようになった。そこで思いついたのが中間課題の導入である。授業の中途段階までの理解度を図ることを目的として開講10週目あたりを目処に中間課題を出すことを同年度より始めたが、寄せられた答案を眺めているうちに、学生は何を分かっているかを苦手としているのかが把握できるのではないかと、答案の中で引き起こされているエラーの発生件数や発生率の推移から、重点を置くべき指導ポイントが見えてくるのではないかと考えるようになった。そこで、年によって課題内容を変えてしまうことでその難易度の差が成績データに“ゆれ”を生じさせてしまうことを防ぐため、翌2007年度以降もまったく同じ内容の中

間課題を2022年度現在に至るまで一貫して出し続けた。

中間課題の内容は、2分の2拍子・8小節のバス課題（ト長調）とソプラノ課題（イ短調）の計2問で、採点方法は各50点満点の減点方式。符頭に棒がないといった軽微なものから連続5度・8度のような重大なものまでエラーの種類に応じて減点数を規定し、1点単位で細かく点数化してSABC²⁾の仮判定を出すというものである。

3. 2012年度の気づき

月日を経て2012年度を迎え、それまでに蓄えられた7年分の成績データを振り返ると、バス課題で6割に相当する30点に達していないD判定の者（いわゆる追試予備軍）ほどV-VIの連結を失敗する率が高く、限定進行も正しくできない傾向があることが分かった。

中間課題の採点結果はバス課題、ソプラノ課題、2問を合わせた総合の3パターンで成績表にまとめるが、初級のソプラノ課題ではV-VIの設定を用いずとも解けてしまうため、ソプラノ課題の成績からはV-VIに関するデータが得られにくい。よって、本稿では観察や考察の範囲をV-VIの場面を確実に設けてあるバス課題の成績表の推移に絞るものとするが、当時最新の2012年度分のデータ（表1）を見ても、V-VIおよび限定進行に係る欄において、下方ほどにエラーを示す黒い印の分布の密度が高まっていることがうかがえる。

なお、ソプラノに定形外のうごきを与える件数や連続・直行の件数が多いのも目立つが、これは共通音保留や配分一致といった初歩的な連結の要領の失念によるものが殆どであり、基本重視の姿勢を崩さず丹念な指導を重ねることで期末試験前までにはほぼ改善できる事案である。

4. V₍₇₎-VIの連結

4.1 それまでどのように指導していたか

V-VIの連結は初学者が最初に直面する大きな壁のひとつである。譜例1-①は、Vが有する導音をまず優先的に導音進行⁸⁾させ、次に導音の解決先の音を頼りに、配分一致の考えに基づいて密集のVIを配置するというものだが、実際には2つの連続（連続5度と連続8度）が起きてしまっている。基本に忠実に実施したつもりが重大事故を招いてしまった悪例であり、このような事態に陥らないために、導音進行は守りつつ、連続を回避するための措置として、②のような特殊な連結を行う。VIが3音を重複させた標準外配置になる

¹⁾ 本稿では、和声課題の答案における記譜上のミスや禁則に抵触した箇所など減点の対象となる大小さまざまな事項を総括して「エラー」と称している。

²⁾ 素点が9割以上をS、8割以上9割未満をA、7割以上8割未満をB、6割以上7割未満をCとし、ここまでは合格の扱いとする当大学の評価方法。6割未満はDとなり、追試の対象となる。

表1 2012年度中間課題（バス課題）の成績表。考えうるかぎりの禁則項目の欄が設けられ、各種エラーの分布が一望できる。

2012年度 和声学 中間課題(バス課題) 成績表 平均 30.18 点

●=減点対象 ▲・△=減点対象外 各記号に添えられた数字は、接触した回数を示す。採点方法:50点満点からの減点方式。
空欄欄については、特別に1回のみの接触については減点なし。「同じ声部の組み合わせでn連続する」(n-1)点の減点とした。

成績	記譜上の基本			音域・距離			和音の設定や配置における問題			1声の進行		導音に係る反則		7音に係る反則		9音の反則		定形や諸々の用法に関する問題					連続と直行																													
	1箇所につき-1点	-2	-1	-2	-3点	-0点	-3	-0点	-2点	-3点	-2点	-3点	-0点	-3点	-0点	-3点	-1	-2	-1	-2	-0	-5点	-3	-3																												
級別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40												
人数	5	4	3	0	40	4	10	0	3	5	3	7	4	0	13	8	2	3	1	8	4	0	0	0	11	3	0	2	2	4	0	38	3	22	4	29	5	4	18	11	4											
発生件数	52			14			81			4		22		57		0		64					97																													
統計	369																																																			
接触した人数	1	2	2	0	1	1	8	0	3	3	7	4	0	9	7	5	13	1	8	4	0	0	11	2	3	0	15	0	7	7	4	0	0	0	11	3	0	1	2	4	0	25	3	3	12	4	17	5	4	14	9	4

① 密 → 密
導音進行
連8
C: V VI

② 密 → Δ
導音進行
3音重複
C: V VI

③ 密 → 完 → Δ
導音進行
経過音
C: V V₇ VI

④ 完 → Δ(不完)
導音進行
7音進行
C: V V₇ VI

譜例1 V₍₇₎-VIの配置と連結についての確認を示したもの

ことや、上3声が2度上行（導音進行）・2度下行・3度下行という3パターンの横のうごきを役割として分け合うことになるのもV-VIの特徴といえるだろう。したがって4声全員が並行するというのはいないのであって、むしろ連続が起きる可能性が高まり、非常に危険である。また、4声全体を見たときに、バスを含む3声が2度のうごきを示している中で、唯一3

度うごいている声部があることになるが、この3度下行には潜在的に経過音が存在しているのであり^{6) 7)}、③のように“見えない経過音”を含んだ瞬間に経過的偶成和音としての完全形のV₇を見ることができる。これを表面化させて“見える和音”にすることによって④のようなV₇-VIの連結も正しく行えることになる。相変わらずVIは標準外配置であり、3和音の標準配置（密集・開離）を完全形、3音重複形や5音省略形などの標準外配置を不完全形と位置づけるならば、V₇-VIやV₇-Iにおいて「完全⇔不完全」が成り立つ。これはV₇が基本形であることが条件だが、V₇-VIなのにV₇が不完全形になっていたり、VIが綺麗な密集になっていたりしていたら、この状況が何かの禁則の原因となるのである。本授業では「禁則が起きることには原因があり、推敲は原因に気づくことから始まる」と常に強調している。

これらをふまえ、V-VIの連結については初学者対象であれば特に丁寧な指導を要すると考え、要領や諸注意に係る要点を整理して以下のようなまとめを受講者に提示していた。

1. V-Iのときと同様に導音進行を守る
2. VIは3音重複の標準外配置にする
3. V₇の基本形と後続和音とのあいだでは完全⇔不完全の原理がはたらく

- 3和音の標準配置（密集・開離）を完全形，標準外配置を不完全形と位置づけたとして， V_7-VI の場合， VI が不完全形であることが前提であるため， V_7 は完全形にしなければならない（不完全形の V_7 から VI への連結ができてしまう例外があるが⁸⁾，初級の段階では言及しない）
- V_7 を用いる場合，導音進行に加え，7音進行も守る
- 標準外配置ができるのは $V-VI$ の VI の3音重複形，曲末の I の5音省略形，その他連続を避けるための緊急措置の3パターンに限られる
- 標準外配置は連続の回避を主目的とした“いたしかたない配置”であり，むやみな使用は控える

譜例2 学生の手による $V_{(7)}-VI$ における失敗の実例

さらに $V-VI$ の連結についての良い例と悪い例の比較観察を行い，学生からの気づきを列挙していくうちに見えてくることをまとめたのが以下の4点である。これらは上記7箇条の内容の一部を言い換えたにすぎないものがほとんどであるが，言い方を換えるということはあるため，推敲の目を養うことにつながると考え，このような「言い換えのまとめ」も毎年実践してきた。

- $V_{(7)}-VI$ のときに4声が全員並行することはない
- $V_{(7)}-VI$ のときに VI の配置は密集・開離にならない
- 不完全形どうし，もしくは完全形どうしの V_7-VI が結ばれることはない
(初級の段階では不完全どうしの連結が成功してしまう例外⁸⁾には言及しない)
- $V_{(7)}-VI$ の際の限定進行（導音進行と7音進行）に例外はない
(本当はあるが⁸⁾，初級の段階では「例外はない」と言い切っておく)

4. 2 学生はどのような失敗をするのか

譜例2は2006～2012年度の7年間のあいだに発生した $V-VI$ の失敗例の中でも特に多く見受けられた事例を厳選したものである。なお，中間課題のバス課題はト長調であるため，譜例中のものはすべてト長調としての $V_{(7)}-VI$ の実施例である。

- ①は三重に禁則を犯した最悪の例。
- ②は，たしかに VI は標準外配置になっているが，重複させる音が違っているために外声で連続5度を引き起こしてしまったというもの。
- ③もまた VI において3音ではなく5音を重複させており， V_7 も不完全形になっている。完全⇔不完全の

³⁾ 本授業では，外声のみに適用される反則としての並達8度や並達5度を直行8度・直行5度と呼び，③のように外声にかぎらない任意の2声によって引き起こされる反則としての並達8度にかぎっては，これを隠伏8度と称して区別するようにしている。

原理を守らず不完全形どうしを結んでいることにより，7音進行とソプラノの3度下行とで隠伏8度³⁾が起きるといふ支障が生じている。

④は導音進行ができていないために7音進行と連続5度が起きている。「 VI が綺麗な密集になっている」「完全⇔不完全になっていない」などの原因が察知できれば異常に気づけただろう。

⑤は採点者を困惑させる不可思議な実施例である。まず限定進行がいずれもできていない。さらには VI であるはずが一度も授業で紹介したことがない II^2 になっており，縦（和音の構成音）も横（限定進行）も確認不足と言わざるをえない。

⑥に至ってはもはや $V-VI$ にもなっていない。初級の段階では I^2 が V から離れて単独で使われることはなく， IV^1 も5音省略の上に3音重複という配置バランスの悪さである。察するに，ハ長調による例示を見すぎたのだろう。よく見ると，ト長調のバスに対して頑なにハ長調としての上3声で答えているのである。このように移調に対応できない学生も一定数存在している。

4. 3 各種教則本はどのように伝えているか

外崎・島村（1958）の『和声の原理と実習』（音楽之友社）では，まず導音進行を必ず行わなければならないとし，共通音がない和音どうしの連結において上3声をバスに対して反行する（この場合，下行する）という基本姿勢のなかで，上行する導音だけは例外となることが強調されている。 V_7-VI の連結については，二つの限定進行に触れた上で，「ふつう V_7 は完全形で用いられる」とし，不完全形の使用についてはこれを強く禁じてはいない。とはいえ，不完全形によって重複している根音の処理に困るとして，可能ながらもその連結は「ごちない」としている⁶⁾。

その後，島岡を執筆責任として1964年に世に出された『和声 理論と実習 I』（音楽之友社）では，意外にも最も基本的とされる $V-I$ の解決進行について紹介されていないため， $V-VI$ についての記述の中で

初めて導音についての説明がなされるが、上3声のうごきについては、導音進行以外は「もっとも近い音へ下行させる」と、表現がより具体的になっている。加えて、VIは上3声中に2個の3音をふくんだ標準外配置になることにまで触れており、これを「連結の必然性によるもの」としている。不完全形・完全形の呼称が上部構成音a)・b)に改まっているものの、 V_7-VI にあっては、上部構成音b)すなわち完全形の V_7 を用いることを推奨しており、不完全形の使用については本編では紹介されなくなっている。 $V-VI$ においては二つの限定進行は「いままでどおり」とであるとの記述に加え、5音のうごきについても「つねに2度下行する」と新たに言及されていることは注目に値しよう⁸⁾。

『和声 理論と実習 I』の上梓から34年後に編まれた島岡の執筆責任による『総合和声 実技・分析・原理』（音楽之友社）に至って、完全形・不完全形の名称が復活したことに加え、それまで別々に紹介されていた $V-VI$ と V_7-VI が初めて同じ欄内に並び立ち、文字通り総合的な扱いになった。 $V-VI$ における上3声のうごきについては、二つの限定進行に触れたのち、「その他の音はそれぞれ手近な音へ向かって下行する」という表現に改まっている。VIについては、上3声は根音を欠いた3音重複形であることが新たに明記され、 V_7 の不完全形については、ついには「用いない」と断じるようになった⁷⁾。

そのほか、伊藤・柳田（2002）の『和声の要点』（サールベル社）では、まずVIは転回しないことの確認がなされる。そののち、 $V-VI$ の場合と V_7-VI の場合を示し、限定進行をした上で、残りの声部については「最も近い構成音に下行させます」としている。VIが3音を二つ有する標準外配置になることにも触れており、簡潔かつ丁寧に要点が押さえられている⁹⁾。

『新総合音楽講座7 和声法』（一般財団法人ヤマハ音楽振興会）は、ガイドの文言が非常に少なく、 V_7-VI のときの V_7 は完全和音（完全形のこと）でなければならない、不完全和音（不完全形のこと）を使用すると禁則を起こす旨が述べられているにとどまっている¹⁰⁾。

これら和声に係る各種の教則本の掲載内容を比較して気づいたことは、初学者にとって $V-VI$ がとりわけ細心の注意を要する連結であるにもかかわらず、どの本も共通してその説明にとりわけ多くの紙面を割いているわけでもないということである。よって、どの本を教材とするにしても、授業者には事前に内容を咀嚼した上で、受講者のために補足を充実させるなどの工夫が求められることになるだろう。

ただ、これらの前例に対し、河江（1991）は『新和声法教程 [講義編]』のなかで、 $V-VI$ のときの V_7 のうごきはシード／レード／ソ－ミの組み合わせであると簡潔にして明快な表現をしている¹¹⁾。実は島岡も『和声 I』や『総合和声』の中で同じようなことを

述べているが、その表現は $vii \rightarrow i$ 、 $ii \rightarrow i$ 、 $v \rightarrow i$ という音度表記であった。それに対し、明確に階名でうごきを示したことは、わかりやすさを伴う点で画期的といえた。さらにはVIにおける2つの3音が女声や内声で同度重複する可能性があることにも触れており、これについて「何んら躊躇することはありません」と、2音を同度で重ねることを怖がりがちな初学者たちを勇気づけている。

河江が唱えるシード／レード／ソ－ミの励行は、わかりやすい要領紹介の先駆といえるが、これに対して「とにかくシード／レード／ソ－ミさえやっていたら間違いはない」といったどこか機械的な印象を受けたことで、当初は授業者として学生に紹介するには一抹の抵抗があった。しかし、 $V-VI$ の失敗率の高さに対しての改善策が見出せない状況が続くうちに、初級和声においてはそれくらい端的にわかりやすく紹介するのがよいのだろうと考えるようになった。

5. データの推移から得られた仮説

あらためて中間課題（バス課題）の7年間（2006～2012年度）における $V-VI$ の失敗率の推移（表2）を見てみると、実に50%を超えた年もあり、2011年度までは常に3分の1以上を記録するというありさまである。2012年度に至り、初めて30%を下回ることができているが、失敗を示す▲の分布を見るに、成績がかんばしくないものほど $V-VI$ を失敗するという傾向が顕著であることがわかる。かたや限定進行を正しく行えていない件数の推移（表3）を見ると、これもやはり成績不振者層にエラーを示す●が比較的多く見受けられるが、 $V-VI$ のときと違い、その分布は幅広く、●印の成績上位者層への浸潤も目立つことから、限定進行をしてないというエラーは毎年のようにクラス内全体に蔓延していることがうかがえる。

以上のことから、 $V-VI$ の連結と限定進行についての指導徹底を図ることができれば、受講者の理解度を示すバロメーターでもあるクラスの平均点の底上げができるのではないかとこの仮説を立てるに至った。

6. 歌唱教材の作詞・作曲

6.1 歌唱教材の導入とそのねらい

仮説を立証する手段として思いついたのは歌である。煩雑な事柄も歌にすると不思議に覚えやすいように、音楽を介することで記憶への定着を促進させる効果が高まるのは、歌うことが人間の記憶の中でも反復学習によって習得した一般的知識である意味記憶や、歌詞の順序（文脈情報）を思い出す際に個人的な体験や思い出を伴わせるエピソード記憶といった長期記憶（陳述記憶）に大きく作用するからといわれる¹²⁾。

表2 V-VIの発生件数および失敗率の推移

順	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
1							
2							
3							
4	▲	▲		▲			
5							
6							
7				▲			▲
8							
9							
10		▲			▲	▲	
11					▲		
12	▲					▲	
13	▲			▲	▲		
14	▲			▲			
15			▲	▲			
16				▲	▲		
17	▲	▲		▲	▲	▲	
18		▲				▲	
19	▲		▲				
20	▲	▲		▲	▲		
21	▲	▲	▲	▲			▲
22	▲	▲	▲	▲			
23	▲				▲		
24		▲	▲		▲	▲	
25				▲	▲	▲	
26	▲			▲	▲	▲	▲
27	▲	▲	▲		▲	▲	▲
28	▲	▲	▲		▲		
29	▲	▲					
30		▲	▲		▲	▲	▲
31		▲	▲		▲	▲	▲
32		▲	▲		▲	▲	▲
33		▲	▲		▲	▲	▲
34		▲			▲		▲
35					▲		▲
36							▲
37							▲
38							▲
39							▲
発生件数	13	17	11	14	16	12	11
発生率	44.83%	50.00%	33.33%	51.85%	44.44%	36.36%	28.21%

■ ... S (50~45点) ■ ... C (34~30点)
 □ ... A (44~40点) ■ ... D (29~0点)
 ■ ... B (39~35点)

そこで、V-VIの連結の要領や2つの限定進行（導音進行・7音進行）について覚えることを目的とした内容に特化させた歌を歌唱教材として作詞作曲し、2013年度からV-VIを取り扱う回に楽譜（次頁譜例3）を配布して、以降、毎時の導入で歌わせてみることにした。この歌唱教材は、河江が提唱する「シド／レド／ソミ」の潔さをそのまま旋律に乗せて、小気味良く、分かりやすく、歌いやすく、覚えやすい歌をと意識しながら、半ば即興的に生まれたものである。同曲の制作にあたり、潜在的記憶を意識させることでかつて勉強したことの効果が残っていることを自覚できるとして、学習場面での潜在的な記憶行動に関するメタ認知が行われる可能性について明るい展望を示した上田・寺沢（2008）の研究¹³⁾は、心強い後押しとなった。加えて、和声学習においては実際に鍵盤を演奏して耳や手に馴染ませる「弾く和声」の実習も伴うため、手が覚え込むくらいによどみなく4声体の実施例が弾けたならば、長期的な潜在記憶である手続き記憶¹²⁾として深く脳に定着することも期待できよう。顕在学習によって得られた知識と歌や演奏によって得られるさまざまな記憶を複合的に脳内に根づかせることで和声に係る総合的な学習効果の向上を図ることも、歌唱教材導入のねらいのひとつである。

表3 限定進行に係るエラー発生件数の推移

順位	2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012	
	導音進行してない	7音進行してない												
1														
2														
3														
4														
5														●1
6														
7							●1	●1					●1	
8							●1	●1						
9							●1		●1					
10												●1		
11	●1							●1						
12	●2												●1	●1
13		●1					●1					●1		
14	●1							●1				●1		●1
15	●2	●1					●1	●1				●1		●1
16			●1				●1	●1		●1				●1
17	●2								●1		●1			
18										●1		●2	●2	
19		●1					●1	●1		●1				●1
20			●1	●1				●1	●1			●1	●1	●1
21								●1	●1				●1	●1
22			●1						●1	●2	●1		●1	●1
23	●1	●1	●2					●2	●1					●1
24	●1	●2												●1
25			●1					●2	●1			●1		●1
26	●2		●1	●1					●1	●1				●2
27	●1						●1	●1		●1	●1			●2
28	●2			●2	●1	●1			●1	●1				●2
29	●1			●1						●1				●1
30				●1	●1	●2			●1		●3	●1		●1
31					●1	●1				●2		●1	●2	●1
32												●3	●1	●1
33				●1	●1	●1					●5			●1
34			●1	●2										●1
35														●1
36									●1					●1
37														●1
38														●2
39														●2
発生件数	16	6	8	10	10	12	11	9	11	9	16	10	16	16
発生率	22	18	22	20	20	26	32							

■ ... S (50~45点) ■ ... C (34~30点)
 □ ... A (44~40点) ■ ... D (29~0点)
 ■ ... B (39~35点)

6.2 導入後の学生の様子

学生は皆、予想通りに楽しく歌っており、提供初日には授業後も「♪シド・レド・ソミ～」と口ずさみながら教室をあとにするという光景も見られた。この傾向は、2014年度以降も毎年のように続くことになる。

その後、ハ長調以外の調の課題に取り組む前には、その調に移調したバージョンでまず一斉に歌うということを習慣づけた。例えば課題がハ長調であれば、「♪ミファ・ソファ・ドラ～」と対象の調に合わせて階名を変えることになるため、さまざまな調で歌うことが移調の訓練も兼ねることにもなった。また、これまで、V(7)-VIで連結が起きるなどのエラーの原因究明にさまざまな視点を要していたのが、「歌の通りになってないから」の一言ですんでしまい、歌唱教材の導入には推敲にかかる時間を短縮できるメリットがあることもわかった。

学生の答案用紙の端に「シド／レド／ソミ」のよう

和声学
今月の歌①

これを知っていると追試にならないかもしれない歌

V-VIと限定進行編

作詞・作曲 橋本 剛

【注意】 移調して歌う場合、固定下派の人はその都度音名を変えて歌うこと。

♩=120 *f con brio*

シド レド ソミ シド レド ソミ
2度上り 2度下り 3度下り
(導音進行)

経過音 経過音

ごろく の ときは シド レド ソミ シド レド ソファミ シド レド ソファミ
(V-VIのときの1:3声のうごきはこの3通りに限られてくる)

ソ と ミ の あい だ に は けい か お ん 7 音 進 行 だ 導 音 進 行 だ
(3度下行のうごきの中には経過音が1個潜在しており、これが7音の前身であるとされている)

7 音 進 行 だ 導 音 進 行 だ
(これら2つの限定進行は確実にを行うこと)

譜例3 2013年度より歌唱教材として導入された『これを知っていると追試にならないかもしれない歌』の楽譜（ピアノ伴奏付）。V-VIにおける上3声のうごきおよび二つの限定進行についての確認を促す内容である。なお、学生は移調奏に即応できる段階にないため、移調して歌う場合の伴奏は授業者が行っている。

なV-VIの際の上3声のうごきを確認するメモが残されているという事例も散見され、個々に独自のチェック体制を確立する姿勢が生まれたのも歌導入後の大きな変化であった。

7. 結果

ここからは歌を導入する前の7年間（2006～2012年度）を第Ⅰ期、歌を導入したあとの7年間（2013～2019年度）を第Ⅱ期とわかりやすく区分する（表4）。くしくも第Ⅰ期の受講者総数と第Ⅱ期のそれは231で一致しており、同じ母数であることは、各種の割合の比較結果の信憑性を高めることにもつながる。

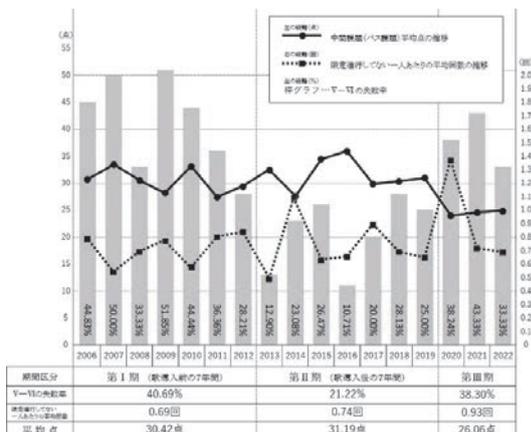
V-VIの失敗率の推移を見ると、その失敗率は導入初年となる2013年に劇的な低下を見せた。第Ⅰ期と第Ⅱ期の平均値を比較しても、第Ⅰ期が40.69%であったのに対し、第Ⅱ期は21.22%という第Ⅰ期のほぼ半分の数値にまで下がっており、歌唱教材がもたらす効果の大きさをうかがわせた。

歌唱教材を導入したことがV-VIに係るエラーの抑止効果につながり、失敗率低下を実現させたことの有意性は確認できたが、その一方で、限定進行をしていないというエラーについては改善が見られず、むしろその件数は増加していた。加えて平均点についてもわずかに上昇したにすぎず、当初に期待したほどの伸びは見られなかった。

8. 考察

第Ⅱ期に入っても思うほどに平均点が伸びなかったのは、V-VIにのみ並々ならぬ高い意識が働いた分、その他の場面がおろそかになり、V-VIではないところで連続や直进行をことのほか連発するという事例が多く見られたことに要因があると思われる。そこには、

表4 V-VIの失敗率・限定進行していない1人あたりの平均回数・クラスの平均点の3つの推移を総合的にまとめたグラフ（2006～2022年度）



全声部の横の流れを満遍なく見ることができるような推敲の目を短時間で養うのは難しいという現実もある。

また、グラフを見るに、歌唱教材を導入した初年となる2013年と2016年については、V-VIの失敗率の低下が平均点の底上げに寄与しているように見えるが、V-VIの失敗率と平均点との因果関係を考えるに、必ずしも互いが影響しあっているようには見えず、むしろ、限定進行に係るエラー件数が平均点の推移に大きく影響を与えており、はからずもこの発見はV-VIの失敗率低下の実現よりも興味ぶかいものとなった。表3の通り、限定進行に係る一人あたりのエラー件数とクラスの平均点を示す2本の折れ線グラフはほぼ反行の関係を示しており、このことは、履修者各自が導音進行や7音進行を正しく行うことができればクラスの平均点が上がることを物語っているといえよう。

思えば、歌唱教材において、V-VIのときのうごきについては具体的な階名を歌詞として口ずさむが、導音進行および7音進行については「シド」「ファミ」のように具体的な階名を示さなかった。このことが学生の限定進行への意識を高められなかった原因になっているのではないか。

9. 課題

前述の考察をふまえ、「7音進行はファーミ／導音進行はシード」と明確に歌詞にして歌わせるように歌唱教材の後半に改訂を施し、2023年度から試行してみようと考えている。

その他については、配置全般や共通音保留・配分一致などの連結に係る基本の大切さを強調しつつ、引き続き丁寧な指導を心がけたい。

10. 第Ⅲ期について

第Ⅲ期（2020年度～）の初年度はコロナ禍にみまわれ、2020～2021年度は対面授業が実現しなかった。歌うこともはばかれた時期であったため、歌唱教材も封印を余儀なくされている。そのような状況下でも中間課題は遠隔による答案ファイルのやりとりをもって果敢に継続したが、表5（次頁）が示す通り、2020年度は初めて平均点が25点を下回り、総エラー件数436は歴代ワースト2位を記録するなど、成績の落ち込みが顕著に出ている。特に配置不全に係るエラーの総件数が他の年度に比して突出して高く、なかでも分析不可能な「謎の和音」を出現させるものが非常に多かった。受講者のなかには自宅に鍵盤を有していないものが多く、書いたものを弾いて確かめられるような環境にないことで、和音の構成音の把握すらおぼつかなくなるという悩ましき事情も背景にあって、痛感せざるをえない遠隔による教育効果の薄れが数字に色濃

表5 中間課題（バス課題）において「Ⅴ-Ⅵの失敗率」「限定進行していない」以外のエラーについて変動が目立ったものをピックアップし、平均点や総エラー件数の推移と併せてまとめた一覧表（2006～2022年度）

	第Ⅰ期							第Ⅱ期							第Ⅲ期		
	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
平均点 (点)	30.59	33.03	30.39	28.00	32.92	27.15	30.18	32.23	27.36	34.29	35.54	29.57	30.09	30.63	23.65	27.30	27.57
総エラー件数 (件)	234	239	260	343	298	450	369	204	339	225	195	369	340	336	436	318	310
1人あたりの平均エラー件数 (件)	8.07	7.03	7.88	12.70	8.28	13.64	9.46	6.58	8.69	6.62	6.96	10.54	10.63	10.50	12.82	10.60	10.33
連続・直行の総件数 (件)	74	75	78	62	68	74	97	72	100	62	41	74	85	67	79	83	88
配置不全に係るエラーの総件数 (件)	46	59	53	53	49	77	81	50	65	62	50	68	71	77	127	99	77

く表れたかたちとなった。2022年度を迎え、回復の兆しを感じられるようになったが、コロナ禍により停滞した成績状況をどこまで回復させられるかは今後の授業改善次第であろう。

11. おわりに —これからの和声教育—

本授業では「対応力・推敲力を高める」ことを目標に掲げていたが、自分の解答のどこが禁則に抵触しているのか気づけない学生は多く、禁則をかわしつつ音楽的に豊かな仕上がりを追求することに楽しみを覚える学生は稀な存在であった。近年は入学してもなお楽典の本すら開いたことがないという専科学生の割合の増加もあって、より簡潔でわかりやすく効率的な授業運びが求められる。この事態に一抹の危機感を覚えるが、鍵盤を扱うことが苦手な学生や、移調に即応できない学生がいることが当たり前になっている昨今、これからの和声の授業は、和声の授業としてだけで完結させるのではなく、ピアノやソルフェージュなどの実習授業や音楽理論・音楽史等との連携も視野に入れ、総合的な育成を図ることが大事になってくるだろう。

教員養成系大学における和声教育の主たる目的は、教授内容を、将来教員になった折に演奏指導にあたっての総譜の分析、創作指導、鑑賞指導などを円滑に行えるための手段に還元できるようになることだと捉えるのが理想であるが、そうはいつても学習の初期段階にあっては公理を理解し課題に向き合う体験は必要であると考え。1半期しかない和声学の授業だが、これからも4声体課題の実施のみに終始することなく、その先に見える和声の本質を示すための内容改善に一授業者として努めたい。和声を学ぶことについて、伊藤・柳田は「和声は決して「=（イコール）規則」ではありません。「規則を覚えること」が和声の勉強ではないのです。」と述べ⁹⁾、新井・木下も「初歩における厳密な理論は必要であるが、その鍛錬を経た先に自由闊達な創意への到達がなければ、音楽実技としての和声の意味がない」と強調する²⁾。これらのメッセージは和声教育に携わるものの総意を代弁したものであるといえよう。

2023年以降も中間課題の成績データはとり続けるが、データ収集はあくまで翌年度に向けた授業改善を図るためのものであるため、データのための授業になるようでは本末転倒であることは十分承知している。

本稿の結論は「限定進行の指導徹底が成績向上の鍵となる」ということになるが、和声を分析や演奏表現に結びつけんとする有機的な考えに照らして、これを「和声課題の音楽的仕上がりの崩れは限定進行に係るエラーに起因する可能性が高い」と換言すれば、これまでのデータも今後の和声教育に活かせる明るい参考材料になるのではないだろうか。

引用・参考文献

- 1) 二宮洋『和声は何故学ぶのか？～その理解と表現を解く～』共同音楽出版社 p.4 2020
- 2) 新井恵美・木下大輔「教員養成課程における和声教育の事例」宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第1号 p.86 2015
- 3) 清水昭夫他『ネットで祭典 和声学課題集Ⅰ』音楽之友社 pp.2-50 2016
- 4) 小山隼平「多様な音楽文化に応じた和声法学習 — 音楽学科必修科目「和声法」の構想に向けて —」札幌大谷大学短期大学部紀要45号 pp.21-24 2015
- 5) 彦坂恭人 編著『実践！作曲・アレンジに活かすためのポピュラー和声学』自由現代社 p.4 2016
- 6) 外崎幹二・島岡譲『和声の原理と実習』音楽之友社 pp.41-254 1958
- 7) 島岡譲他『総合和声 実技・分析・原理』音楽之友社 pp.36-449 1998
- 8) 池内友次郎他『和声 理論と実習Ⅰ』音楽之友社 pp.34-124 1964
- 9) 伊藤謙一郎・柳田憲一『学生のための和声の要点』サーベル社 pp.3-65 2002
- 10) 竹内剛 菅野真子 編著『新総合音楽講座7 和声法』一般財団法人ヤマハ音楽振興会 p.37 1991
- 11) 河江一仁『新和声法教程 [講義編]』河江一仁 p.40 1991
- 12) 中村克樹監修・新星出版社編集部編『徹底図解 脳のしくみ』新星出版社 pp.112-119 2009
- 13) 上田紋佳・寺澤孝文「聴覚刺激の偶発学習が長期インターバル後の再認実験の成績に及ぼす影響」認知心理学研究 第6巻第1号 pp.42-44 2008

(2023年9月25日受理)